

---

# 高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

よみよみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校生の時間外廊道じかんがいろついで

### 【Nコード】

N4985Z

### 【作者名】

よみよみ

### 【あらすじ】

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からない、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日？ になってから気づくのであった。

## 第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

## 第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする。人類の英知の結晶。

「あーうるさいな、誰だよ、こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタルがとでも分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。

どうやら、もう2度寝をしている暇は、無いみたいだ。俺は一つのため息を漏らす。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

はつきり言おう。訳が分からない。俺の睡眠時間2分を返せ

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」

眠たい眼を右手の指で擦りながらをは、またため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は、通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学の時の通学に比べて、風を切る感覚が気持ち居と思うのは、新生活のスタートと言う出来事が加担しているのかもしれない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしく、ウキウキとしていたほうが良いのかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を二度も踏みたくはない。とはいえ、俺だつて、全く期待していないのは、嘘になる。そりゃ高校生だし、彼女の1人でも作りたいなんて思っているのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のチェインメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは

俺が学校に着き、自転車小屋へ我が愛車。まだ新車の19800円。命名『ギキユツパ』を駐車していると、校門の方から、馬鹿のように、いや間違つた、馬鹿な容疑者第1号が大手を振つてこちらへ向かつて自転車を漕いで来る。

「よっおあ〜！ 愛ちゃん」

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かつて来る悪友に、

どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタッタ！ タタタッタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走って行き、右腕で朝の挨拶のラリアットを食らわしてやった。

「グットモーニング！」

「うふー！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言ったら分かる？ 佐伯 利

一俺の名前は、愛田 あいだ 千秋 ちあきだと、あと何回言えば、その頭で理解出来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなのもからスリーサイズまで覚えて来たぜ」

「……楽に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴ろうとした時、俺達の目の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、長髪の女子生徒が

かつ、かわいい

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクス共」

「……………」

時が止まった気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てるど昇降口へと消えて行った。

第2話 1 - 3

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「……………」

時が止まったきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だったと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は、昇降口へと消えて行った。

「……………おい、千秋」

その女子が立ち去った後、利一は俺に驚いた顔をして俺に言った。  
「何だ、馬鹿」

「高校つて怖えーな」

確かに、怖かったが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待ってよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒の学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受ける高校を調べて、同じところを受けたんだろうが！滑り止めまで、同じところ受けやがって。こんな奴が、俺よりも、数倍頭が良いと思うと、人間は、つくづく平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虐め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持っていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか」

俺は、まだ白く汚れない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど」

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールムが始まるのは」

「おらああー！」

ブン！

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を指し、前を向き歩きながら、我が、悪友を背中を見せながら右手を頭上へと持って行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そうそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言っていたが、俺はそれをスルーし。

何事もなかったように、スタスタと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなっていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1-3に入ると、いかにも、始まった感じのういういしさ溢れる光景が広がっている。話しをしている者、席に座って静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでいる

る者、様々だ。まだ、慣れていというか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。げっ！

俺が、なんとなく、クラスを見渡していると、さっき、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、静かに、本を読んでいる。

普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないようにしよう。

それから、数分後。教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、安久津」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン！！」  
ドアを開けるな、いなや、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！  
頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリア？　なんで、千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？　このクラスは、全員そろっているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所が無い。速やかに在るべきところへ帰れ。  
「え？　此処は、4組じゃ……」

一歩さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あつ、失礼しましたー！！」

そう言っつて、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1 3我がクラス内は、笑いに包まれた。  
はあくアイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思つが。

### 第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まって1日目という事もあり、これと言つて授業らしい授業もせず。あつという間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやって来た。

今日は、母親に作って貰った弁当だ、学校の売店というのを使ってみたかったが、こういうモノか分からないので、今日のところは無難に弁当を持って来た。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作つて、机をくっ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日目じゃあ、まあ、こんなものだろう。

俺が弁当を鞆から取り出した時、教室のドアが開らき、朝のリップレイのように、また、利一がやって来た。

「ちあきー！ 一緒に弁当食おうぜー！！」  
少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえった。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

.....

嫌な間だ、仕方ない。俺は右の手のひらを額にやり、はあく〜と大きなため息をつく〜と弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食お」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガ！

「あああ、脳細胞が死んだあー」

あすかわらざりアクションの大きい奴だ。

「良かったじゃないか、俺は、お前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの写真を  
ドガ！！」

「何か言ったか？」

利一は、流石に2発目が堪えたのか、かすれるような声で  
「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食うんだ？」

「千秋、俺と一緒に飯を食ってくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」  
変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。も  
うコイツと俺の交友関係はきつとクラスの連中に残念ながら知られ  
てしまっている事だろう。

俺がそんな事を嘆いていると。

「この、ツンデレめー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を当てやがった。

怒。怒。怒。負の感情がヒートアップ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐぎやああああ」

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、  
イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、

「はい」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、  
取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちいあき」

わざとだろうが、女々しい声で俺の名を呼び、

「最近俺に対してのツツコミが激しすぎやないか？」

「何言っているんだ、利一はドMだから喜んでるんだろ？」

俺は、邪気の無い口調で利一に言った。

「いや、俺はドMじゃないからな、それともう少し柔らかく、ツツコミでもいいだろう？」

「そんな風になったら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構うんだ？ 構うにしても他の構い方が在るだろう？」

コイツの俺らに対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だってさ 千秋優しいじゃん」

「はあ！？」

不意な言葉に少し動揺した。

「俺のどつ、何処か優しいだよ」

「俺なんかに構ってくれるしさ 不意な言葉にそんな驚くし。素直じゃん」

コイツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

ちよつと声に感情をこめて言ったが、

「顔が赤くなってるぞ」

「照れて無い、言ってるだろ！」

そんな事を言っているが、若干頬が熱い気もする。もしかしたら顔が赤くなっているかもしれない。こんな事を面と向かって言われるのは苦手だ。

にやにやししながら俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

俺は、このまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思ひ。無理に話しの流れを変えた。

「せっかく高校生になつたんだから、決まつてるじゃんか。天気も良いし、屋上で昼飯つて、俺、やってみたかつたんだよなー」

目を輝かせて、言う利一。

「おいおい、屋上つていつたら、不良のたまり場つてイメージしか無いんだが」

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だつて、今、平成何年だと思つているんだよ、そんな絶滅危惧種居る訳が」

そして、屋上を開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思つたら、目の前に在つた光景は、煙草を啜えた、不良4人が立つていた。

絶滅危惧種居たー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

---

高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

2011年12月17日09時45分発行